



座談会

UTLASをめぐって

.....出席者.....

MASISセンター

中京大学附属図書館

平井邦造

館長

加藤等

伊澤和夏

事務長

清原真玄

黒岩奈保子

司書

小川光男

(敬称略)

加藤恭輔

伊藤康伸

司会 福井司郎

板垣和美

UTLAS誕生の周辺

司会=座談会を始めるにあたって、館長から一言おねがいします。

館長=図書館界においては、電算化によるサービス、及び、事務処理の合理化というものが、研究会や研修会のテーマになることが、最近特に多く、又、すでに、これを実際に行っている大学図書館も多くなり、その報告や見学も盛んに行われています。こうした中で、やはり最大の問題は書誌データを、いかに低コストに、短期間に入力し、しかも、後々効率のいい利

用を可能にしていくか、ということであろうかと思われます。中京大学の図書館でも、ここ数年来、全館でこれらの問題と取組み、将来どういう方向に進むかの結論を出す段階に至っています。そういうことから、本年1月から3月にかけて、UTLASを実験導入し、実際に書誌データを取出す作業をし、その結果をまとめて『図書館学紀要』に発表しようというわけですが、本日はMASISセンターからお三方をお招きし、UTLASについて、お話を伺い、知識を更に深めていきたいと思いますので、ひとつよろしくお願ひ致します。

司会=実験導入について、事務長からお話ををしていただけますか。

事務長=館長からもお話があった通り、私たちの図書館でも、早くから電算化の研究は進めてきました。しかし、これは、あくまでも机上の空論にすぎず、いくら、いろいろな報告を読んで、検討を重ねても、それは他の図書館で出た結果であり、中京大学図書館で出たものではありません。実際に端末に触れて、自分で自館の資料についてキーを叩かなければ本当のところはわからないわけで、館員の中でも、そうした実験導入を望む声が高まって、1月20日から3月29日まで、約2ヶ月間にわたって、書誌データを引出す作業に携わったわけです。その結果については、詳しく発表しますので、それをご覧になっていただければわかりますが、やはり百聞は一見に如かずといいますか、それ以上に、実際に取扱うということは、多くのことを短期間に理解できて、非常に効果があったと思います。UTLASを導入することは高価な買物でありますし、また、中京大学の電算化の方向を決定することでもありますから、慎重の上にも慎重に検討しなければいけないわけで、そういう意味でも、今度の実験導入は意義があったと思います。

司会=UTLASというのは、トロント大学の図書館オートメーション・システムということですが、私どもは、情報先進国といえばアメリカしか思い浮かばないわけで、カナダにこの様な大きなデータの集積があることに驚くわけですが。

加藤= そうですね。カナダというと国土の大半は森林で、産業といえば林業と漁業というぐらいしか知らないですね。モントリオールのオリンピックで少しはカナダの様子がわかりましたが、日本との結びつきも貿易などの面や、観光などでかなり強いわけですが、理解されていない国ですね。

伊藤= 広い国で人口が少ない、それに多民族国家ということですから、日本の国の図書館事情とは違うのではないかと思うかね。

板垣= 人口が2400万人ぐらいで、イギリス系が40%、フランス系が30%、あとは他の民族ということですね。英語が主なのでしょうが、フランス系カナダ人の4分の3が住んでいるというケベック州ではフランス語が主となっているという国ですから、多民族、多言語で図書館もいろいろな言語で書かれた資料をもち、いろいろな言語を使う人にサービスするわけですから大変でしょうね。

事務長= U T L A S のシステムができるのは、1963年オンタリオ州の新設の5つの大学のユニオンカタログを作ろうということで開始されたということですね。

小川= オンタリオ州新設大学図書館プロジェクト、O N U L P ですね。

事務長= U T L A S を生んだトロント大学というのは、北米でも5本の指にも入るかといわれるほどの規模で、年間5万から6万冊を受入れる非常に大きなロバーツという図書館だそうです。

板垣= トロントは、オンタリオ州の州都で、都市域人口が290万人というカナダ第1の都市ですから、その州立5大学というと、人口の集中度からいっても、ロバーツを中心にまとまりやすかったのでしょうか。

平井= そうですね。その当時はアメリカの図書館の中でも、コンピューター化、あるいは目録作成システムをどう作っていくか、という一連の動きがあったのですが、図書館の動きより、コンピューター技術の方が先行してしまう傾向があったようですね。そういうところで図書館のシステムを作りあげていくことはかなりむつかしかったと思います。

事務長= 1971年にU T L A S として組織が再編されて、1973年にオンライン

ンで目録作成を可能にする、C A T S S、即ちカタログ・サポート・システムが生まれるわけですね。

平井 = そこまで行くには糺余曲折もあったようで、例えば音標符一つつけるにしても「これはウムラウトはつけられますか?」「つけられますけどこれだけのお金がかかります。」「アクサンはどうですか?」「これもつけられますが、これだけのお金がかかりますよ。」という工合で、なかなか、きっちりとした図書館のシステムができない。

伊藤 = そんな状況の中で、O C L CとかR L I NとかW L Nといったアメリカのシステムが生まれていくわけですか。

黒岩 = カナダのU T L A Sが1973年、アメリカのO C L Cが1967年、W L Nが1977年、R L I Nが1978年、イギリスのB L A I S Eもその後に続いてオンラインでのサービスを開始します。

平井 = まあ、経過としてはそうなんですが、もう一つは国情といいますか、情報をできるだけ広範囲に知らせようと努めている国といいますと、まず、アメリカですが、その影響はカナダにも及ぶわけです。

板垣 = トロントはモントリオールより、デトロイトに近いぐらいですから、文化的な国境はあまりないでしょうね。

加藤 = 図書館は相互協力の面からも、郵便や電信の事業のように、国境を超えて資料のやりとりをしますから、陸つづきのカナダとアメリカでは図書館の結びつきも強いでしょうね。

黒岩 = ネットワークというのが生まれやすい下地はあるんですね。地域ごとのコンソーティアというのでしょうか、割とできているんですね。それはアメリカでも同じで、国土が広くて、そこでリソース・シェアリングという話が出たときに、それとは別に機械化が問題になる前になんとかしな



平井邦造氏

きやならないということで、みんなが集まって何かしよう、という動きがありましたから。

小川=アメリカの図書館界の事情みたいな、歴史的なものから考えますと、図書館協力一つとっても、例えばファーミントンプランであるとか、あるいはニューイングランドデポジットライブラリーのようなデポジットライブラリーのシステムであるとか、もう少し後になればN P A C の問題、そうした図書館協力という面での下地が古くからあるということが非常に大きいと思うんですが。



伊澤和夏氏

伊澤=それは確かに、日本での図書館の動きということを考えたとき、ずいぶん違うことなんですね。コンピューターになるか、ならないかということは全然関係ないことであって、これはもしかしたらUTLASのようなシステムを日本の図書館がメンバーとなって、将来使っていくということからも、日本の参加館の中で、又、違う関係ができるてくるかもしれない、ただ、そういったアメリカの図書館のあるべき姿が、日

本で違うということは、それを今後、日本の図書館の中で、どういった型で進めていくべきかということで、随分大きな意味合いをもっているものだというふうに思います。これはどのようなシステムができたとしても、きっと違う観点を、こういった、いわゆる、日本版のユーティリティができたときにも、図書館とユーティリティの日本での関係ができあがってくるのではないかと、私達はうすうす感じことがあるんですね。

平井=こうしたシステムができあがっていくとき、アメリカにしろ、カナダにしろ、今、話にあったような下地があって生まれてくるわけですが、もう一つには、こういうシステムには大変なお金がかかるので、どうしても国なり、州なりの援助がなければ当初はやっていけなかった。そういう

事情と、さきほどもお話に出てきましたが、カナダというのは、それこそ木材と漁業と毛皮ぐらいで、天然資源に頼る一次産業の国でしたから、そこから脱却しなければならないこともあり、情報産業に力を入れるようになったのです。これは国策として力を入れているもんですから、通信技術ではアメリカより先行しているものもあるということです。例えば電話を開発したベルはカナダ人です。

伊藤= そうした条件が整っていって、UTLASが生まれたわけですね。

平井= そうですね。今、いったように、経済的要件で国なり、州なりが金を出す、それをONULPといったような仕事として、トロント大学あたりが中心になって、のんびりとシステムを作り始めたわけです。

館長= 非常に複雑なシステムを作りあげていくわくですから、図書館とコンピューター関係の技術者が話し合いをしていかなければならぬわけで、のんびりと仕事を進めるゆとり、といいますか、つまり経済的基盤があつたわけですね。

司会= 国家が資金的に面倒をみると、情報のナショナリズムというようなものが出てきませんか、カナダとアメリカの間ではそんなことはないのでしょうかね。書誌情報などは、あまり問題はないと思いますが、最近アメリカは科学技術の情報の外国への提供を断わることが多くなっていると聞きますが。

黒岩= いい意味のライバルであるという状態ですかね。そういう情報ナショナリズムがでてきてはいますが、それは現在の問題であり、最初は北米全体の動きとしてスタートしています。カナダからUTLASが生まれたというより、北米で生まれたということですね。OCLC、RLIN、WLN、それにUTLASといった四つのシステムは、それぞれ志向している方向が違っ

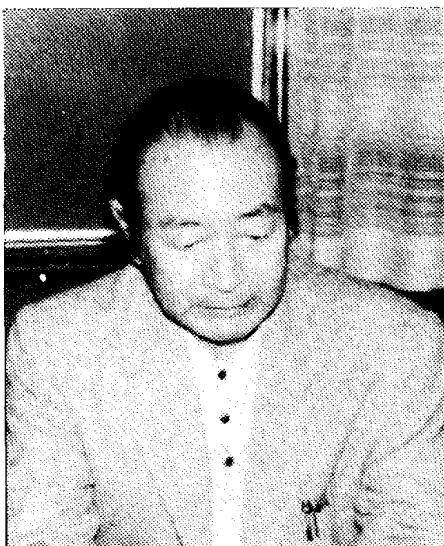


黒 岩 奈保子 氏

でいまして、どのシステムも特徴をもって生き残ってきてているわけです。

UTLASはどんなものか

司会=UTLASの生まれ出た背景というものから、UTLASの特徴といったものに話を移しましょうか。



加藤 等 図書館長

館長=われわれ研究者として、一つおききしたいのは、情報を一日でも早くキャッチしたい、その際、学問領域によって、要請の度合いが違うのではないか、今の話で、各国の書誌データをはじめ、多くのデータを集めるというメインの仕事が表で行われている。そういう際に、一日も早く情報を知りたいということで、経済的とか、その他いろいろの条件があるでしょうが、そのあたりただ単に図書館同志としての連携と

いうことよりも、特殊領域からなるべく、そういう文献収集について機能を促進したい。そういう点では、カナダの事情というのは特別にあるのでしょうか。

平井=カナダの特徴というのでなくて、北米一帯の傾向としまして、特にこういう情報提供機関が作られる一番大きい意味は、図書館ですべての資料を購入するわけにはいかないという経済的理由でしょう。又、例えば医学薬学の資料といった、非常に迅速さを要求される資料では、サービスのスピードが問題になるわけでしょう。そういう意味でリソースシェアリングの考えが生まれ、どこの図書館に何があるということが、早くわかるようにするという、ネットワークづくりが生まれるわけです。

館長=すると、ある意味では、これは少し話が先へ進みすぎるかもしれません、情報をお互いに提供していく場合に、公立的な性格をもった図書館というものが、ある程度上から一率に業務を行う場合は非常にやりやす

いですね。それが私立的な性格を備えると、そのネットワークは作りにくいいんじゃないかと思いますが。

伊澤= そうですね。UTLASもスタートはONULPのような総合目録を作成するプロジェクトですから、それが現在のような独立した機関としてやっていくようになるわけですから。

事務長= UTLASの利用者ベースというのが、大学研究図書館では70%、専門図書館では38%、公立図書館で12%、その他の企業では7%、教育関係が3%ということですが、大学研究図書館が圧倒的なパーセンテージを占めているわけですが、大学図書館は研究者である教員と学生が利用者であることから、先ほど館長がおっしゃった情報を迅速に提供してほしいという、研究者の要請によるのかとも思いますが、その点をお聞かせいただければいいのですが。

黒岩= UTLASは公共図書館の利用が少ないというのは確かにおっしゃる通りですが、UTLAS以外の三つのビブリオグラフィック・ユーティリティの場合も同じで、地域のネットワークから作っていくという性格が公共図書館は強いですから、こうした館種による違いだと思います。

小川= 情報検索、例えばDIALOGなんかを使った場合の公共図書館の記録などを見ますと、當時、その図書館が利用されるのは、人口比にして20%ぐらいらしいですね。そのうち10%ぐらいが常に使う人で、じゃあその人達はどういう人達かというと、高学歴というか学力の高い人であり、職業的にはスペシャリストであり、ホワイトカラーだから、同じくこういうシステムを考える場合でも、その利用者といえば、やはりこういう層の人達が利用者になるのじゃないでしょうか。

黒岩= パブリックライブラリーといつても、ニューヨーク公共図書館と、



清原真玄 事務長

普通のカウンティの図書館とは全く性格が違うので、その点も考慮に入れなければいけないと思います。

板垣=公共図書館の利用者の多くは、それほど多くの資料を必要としない、例えばベストセラーに挙っているような本を借りていくというような層で、書誌の検索が必要になってくる人達は、やはり大学図書館などが多いわけですね。従って大学図書館によって、こうした大きな書誌データーの蓄積が生まれて、それを利用するのも大学図書館ということになるのですね。

司会=機械化をしていく場合。それまで、一般的にはカード目録として図書館の中で、ふえ続けたものを、どのように、機械の中にインプットしていくかということは大問題なんでしょうが、そういう龐大な作業を単館でやっていたのでは、とても時間と費用がかかってしまう。というわけで、UTLASの場合はONULPから入っていったのでしょうか。当時、北米でも、そんな型でスタートしたところは多かったと思います。しかし、結果的にはOCLCをはじめ大きなシステムだけが残ってきたということは、それに、利用者に受け入れられる何かがあったと思われます。その点はUTLASが、どんな優秀性があったと思われますか。

小川=一つには、典拠があるかないかは非常に大きいと思いますね。OCLCがいろんな批判を浴びた一つの原因是典拠システムを最初は持たなかったことがあるんですね。それから、システム的に考えて、面白いと思うのは、各参加館が専用データベースを構築できるという、つまりファイルが持てるということ、この二つが大きいと思うんですがどうでしょうか。

平井=UTLASはOCLCより後発であったために、OCLCがかかえた問題点を見てからシステムづくりができたことは有利な条件でしょうね。RLINの場合は北米の大きな大学のネットワークのような型で始まり、それらの大学の卒業生達が基金をつくり、その資金で運営しているということがあり、正式のメンバーになるには、あまりにも閉鎖的で、100万冊以上の蔵書がなければならぬとか、特殊な資料を何冊以上持っていないけれ

ばだめですか、制約があるわけです。検索だけという第二次的なユーザーとしては利用も可能ですが、

事務長=データは面白いといいますし、ちょっと違った検索もできるんだそうですね。

平井=WLNの場合は規模が小さいまで、例えばデータのメンテナンスなども大変な手作業かけてやっている良いシステムなんですが、規模がちよつと問題ですから。

加藤=そういう意味ではOCLCはUTLASよりデータも多く、多くのユーザーをかかえているんじゃないんですか。

板垣=UTLASがソフィスティケイトされたシステムだといわれるのは、対OCLCとの関係で、後発であったために、いくつかの問題点をクリヤーできたということで、後発であるということは、そういう点で有利だと思うんですが、どうしてもデータの蓄積から見ると、先発システムに追いつくことはできないわけですね。

伊藤=データは多いにこしたことはないでしょうが、OCLCやUTLA Sほどの大きさになると、われわれが利用する立場で見ると、そのデータ量は変りないと見ていいんじゃないですかね。実際にどちらがヒット率が高くなるか、というような問題を考えますとね。

事務長=UTLASの前身といいますか、ONULPの頃、それら五つの教育図書館の古参、中堅の図書館スタッフがLCのパイロットプロジェクトに参加したということが、UTLASをより国際的により利用しやすく育てるもとになったと考えられるんじゃないでしょうか。

伊澤=それは現在でも続いておりまして、LCでもNLCでもUTLASのメンバーが何らかの形で参加している。あるコミッティとか、そういうところに関係している。それは国立の図書館との関係はもちろん、LC、NLCといえども、MARCの関係でこういうユーティリティを作ってきたところの母体、バックアップしてきた機関として、図書館の動向をすばやくキャッチすることと、技術のあるいは学問的に繋りがなければ

ならないということがあるんです。

事務長=一人前になればストップしてしまう、というんじゃなくて、何年でも続けていくんですね。

伊澤=十何年間オンラインのサービスを通じて利用者に接していて、なるべく使いやすいように、ということで、何度も変ってきてているわけです。そういう意味では利用されていると同時にメンバーが成長させてきているわけですね。これはUTLASにかぎらず、OCLCでも、RLINでも、WLNでも全く同じで、メンバーは決して単なる利用者というのではなくて、私が参加して、このユーティリティをよくする、大きくするという自覚というものがあるようですね。

伊藤=今度CATSSⅠからCATSSⅡへ移るのも、UTLASが大きくなるということと、一つには各メンバーの、こういう機能をもってほしいとか、ここはこういうふうに変えてほしいという、さまざまな意見を反映しているということだそうですね。

UTLASとネットワーク

司会=ここで、UTLASを含む北米図書館のネットワークの現状というような、ホットな話題に変えてみたいと思います。黒岩さんは新しい情報をお持ちでしょうか。

黒岩=ライブラリーオートメーションが始まって、すでに30年が経過しているんですけど、1960年代の初期というのは、ライブラリーファンクションとしまして、収書管理、逐次刊行物管理、貸出管理、オンライン目録、というものを、自分の館で何とかコンピューターを使って処理できないだろうか、という発想からスタートしたわけですね。当時コンピューターは高価なものですから、ハーバード、スタンフォード、トロントといったような大きな大学が個別にやりはじめたんですが、失敗してしまったんです。その失敗の原因是、スタッフをかかえ、ハードウェアを持ち、ソフトを開発していくという、経済面でのゆきづまりなんです。また、コンピュータ

ーのテクノロジーもこれを支えるまでになっていなかったわけです。

板垣=そこに従来の手作業でのシェアードカタログの考え方をもとに、コンピューターシェアードカタログの発想が生まれるわけですね。

黒岩=そうですね。だれかが一冊の本をカタログgingしたら、なるべくオリジナルカタログgingはしない。これはオリジナルカタログgingが高価で時間もかかるからですね。

加藤=シェアードカタログgingで省力化とコストダウンをはかるわけですね。

黒岩=そうですね。しかし、オンラインシェアードカタログgingを支えていくには、それなりの質ですとか、スタンダード化ですとか、いろいろなルールが必要になってくるわけですね。

加藤=そうなると、お互いに連絡をとりあってルールを作っていくかなくてはなりませんね。無秩序では困りますから。そういうところに相互協力の精神も生まれてくるわけですね。

黒岩=こういうことが、オンラインでやつていこうという動きを支えるバックグラウンドになったと思います。そういう動きがありまして、M A R C テープ利用方法の検討などができたわけですが、シェアードカタログgingをする場合、小さい大学ではM A R C のテープを自分のところでもわせないわけです。まだコンピューターがそんなにたやすく買えない時代ですから。それじゃどこかが中心になってやりましょう、ということになってトロント、オハイオ、ワシントンステーツ、スタンフォードの大学図書館といったところが始めるわけです。で、その他に I L L の機能としてロケーションのコードをつけて、どこにあるかわかるようにした。その二つが、まず、収書管理、貸出管理、逐次刊行物管理、オンライン目録等



加藤 恭輔 氏

の館内システムのファンクションから離れてセントラライズしていったのです。

加藤 = 一館でやって失敗するとリスクが大きいから、そのリスクもシェアーしようというわけですね。

黒岩 = そうですね。そんな考えからネットワーク化が進んでいったんですね。そして、最初はカタログギングを指向していった、その基盤の上にインティグレイテッド ライブラリーシステム、つまり多機能多目的型がないだろうかということで後は、収書管理、逐次刊行物管理、貸出管理、O P A C も一緒にやりたかったわけです。ビブリオグラフィック・ユーティリティ ネットワークとしてやろうとしていたのですが、ビブリオグラフィック・ユーティリティもこれだけ、カタログギングのための大きなデータをかかえてしまうと、メンテナンスやいろいろなことにもお金がかかりますので、こちらの方までデベロップメントにかけていられないということが実情であったようです。そして、ビブリオグラフィック・ユーティリティとして、それをどんどん切り離していくようになりました。そこで、かわりにできたのがターンキー ベンダーというものが生まれ鍵をまわしてスイッチを入れるとすぐに動くというような、だれかが開発したものを自分のところへもってくるという、ターンキーのシステムがファンクションごとに開発されるようになりました。それが70年代の後半ぐらいから始まったと思います。80年代になって、コンピューターも比較的安価に手に入りだし、ターンキーのシステムも手に入るというようになりました。それで、ローカルシステムとして、館内処理の部分を自館で持つようにして、カタログギングと I L L については、ネットワークからデータをとる、もちろん館内処理もそのデータを使うわけですから、ビブリオグラフィック・ユーティリティは自分では開発しないけれども、インターフェイスを開発するとか、というようなときに協力態勢をとるようにするわけです。例えば U T L A S の場合は I N N O V A C とか、いろいろありますね。O C L C も L C 2000 というインティグレイテッドのシステムを売り出してい

ますが、あれはもともと OCLC が開発したものではなくて、他の会社でできたものを買い取ったものです。ですから、動きとして、ローカルシステムでできるものと、ビブリオグラフィック・ユーティリティができるものと分けていく、機能分化、役割分担というようなものが、今は明確にでてきてているように思います。で、ビブリオグラフィック・ユーティリティは何をやって、ローカルシステムは何をやるかというのは、まだどこへいくのかわからないわけですが、今のところビブリオグラフィック・ユーティリティではドキュメントデリバリーですね。ニューメリカルのデータベースをもって、生で情報を提供しようとか、カナダでは iNET とゲートウェイシステムというのをやっています。それは一つのターミナルからいろいろなデータベースを使えるように、ということですね。将来的には同じコマンドで、どこのデータベースの情報も引き出せるようにトランスレーションするわけで、そういう方向へ合せ、どんどんビブリオグラフィック・ユーティリティは力を注いでいるのが現状だと思いますけど。

司会=黒岩さんのお話からも、こうしたシステムが生き物のように、どんどん成長していることがわかりますね。ところで、UTLAS を導入する側として、どんなところに魅力を感じますかね。

事務長=情報をこまぎれに集めますとね。UTLAS というものが、各図書館のマイクロコンピューターベースという、図書館サービスの分野にも入ってきてている。これを、どう使いこなしていくか、という図書館サイドの問題にかかわってくることですが、レファレンス関係はいうまでもなくオンライン発注システムである、ACCORD とそれから CATSS と調和したフレキシブルな、そのシステムがユニークなところなんだというものですから、そういうようなものを通して図書館資料入手に関しては、複雑な処理が完全に制し得るようになったところに魅力を感じているわけですがね。

司会=使う側としてはどうですか。

小川=多分、使う側として一番表面に出てくるのは、UTLAS そのもの

の効用より、人員削減とか、そういうことにつながってくることが、きついことで、あまりそういうことは表面に出でもらいたくないんですけども、実際に扱ってみた、今の段階で判断して答えますと、マニュアルで目録を作成することと比べますと、普通の人が一日がかりでするような仕事が、多分一時間ぐらいで、目録なら目録がでてきてしまうだろうし、それがカードになって打ち出されるまで、そんなに時間がかかるないということで目録作業一つ考えても、かなりの省力化が可能だと思います。

事務長=ただ、図書館員の仕事が目録をとることだけではないので、省力化されたからといってすぐに人員減につながるというものではないでしょうね。

伊藤=むしろ、それによって、今まで手をぬいていたというか、やらなければいけないけど、やれなかった仕事を、どうしてもやる、というような仕事の拡大があると思いますね。

小川=逆にまあ、あんまり大きなことはいえないんですが、一つの危惧としてもっていることは、かつて図書館員というものは、その図書館にある資料については、かなりオールマイティにその内容までを知っていますが、現在は処理だけに追われてしまって、中味まで把握することができないようになってきているわけです。まあ、そんな傾向があるところに、こういうものを使うことによって、ますます資料に対する習熟度というか、知識というものが薄れていくんじゃないかなあと、感じとしてはそういうものをもっています。

司会=研究者の立場からはどうなんでしょうか。

館長=やはり、さきほども申しましたように、学問領域によって、だいぶ問題が違ってくると思いますね。そういう意味では、理科系あたりの学



伊藤 康伸 氏

問領域、私のやっている心理学なんかは比較的理科系的要素を含みますけれど、そういう面では一日も早く文献情報が得られるという点の魅力があるのと、あと、図書館としては、やはり、経済性とそれに伴う利用度ですかね。そのあたりが、うまくバランスがとれないと、単なる飾りにすぎなくなってしまう恐れもあります。したがって、その辺のバランスと、あとは情報量の多寡というところで、そのあたりを考えてみると、私は、もしこういうものが、本当に便利になると、研究状況というのもだいぶ変ってくるんじゃなかろうかと、予想しているわけですが、

加藤＝雑誌などが非常に多くなっている傾向というのもそこにあるかもわかりませんね。研究者が、いろいろな参考文献を早く大量に集められ、また、なるべく無駄なく、ポイントだけをつかまえられるようになれば、それに基づいて、論文を書くことも早くなりますし、いわば知的生産の回転が速くなるわけですね。

館長＝これは、あまり U T L A S などについての知識の無いところで単純にいいますけど、ボタン一つ押すと、必要な文献情報がずらりと出てきて、文献検索に費す時間というものが少なくなると、研究者として、ほとんど同一次元で即日問題が考えられるという有利な面もでてくる。そういう意味では逆にいうと、今まで少々のんびりしていたところが、逆にこういうものによって、尻を叩かれながら、あたふたと走りまわらなければならん、といったようなところがでてくるかなー と思います。

板垣＝それは図書館の仕事でも同じでしょうね。機械に仕事のスケジュールが決められていくとか、機械のスピードに追いつくために必死で仕事をしていくとか……

館長＝研究者も、それをサポートする側も忙しくなることは間違ひありませんね。それに、もう一つは、それぞれの学問領域によって、各研究機関の共同作業的な点に関する利用の度合いとか、総合すれば、われわれとしては、こういうものの実用化ということは大いに歓迎するということになりますが、ただ、逆に、今度は、この情報の中に入らなかったもの、これ

との落差がでてきてしまう、そのあたりの処理をうまくしないといけないし、これはむつかしい問題ですが、重要な文献でも、そのデータが入ってなければ、全く無いものとして処理されていく、そういうことが起り得るわけですね。

加藤=所蔵している、ということと、その資料が存在している、ということですね。参加館が多くなり、データ量も増えてくると、どこかの網にかかるてくるということでしょうが、マニュアルでやっている場合の方が漏れは多いでしょうし、規模も小さいから、信頼度も小さく、まだ、ほかにあるかもしれない探すから、しっかり探したような気になるんでしょうね。

伊藤=機械に頼りすぎたり、機械は何でもできるんだという過信はいけませんが、人間の能力にも限界があって、機械の方が優れている場合もあるので、そこらをうまくやっていくということですね。

司会=今、期待や不安が、いろいろな立場から出てきたわけですが、まだ、こんなことがあるんだよ、というようなことも付け加えて、平井さんいかがでしょうか。

平井=さきほど、小川さんの方から、こういうコンピューターのシステムを使った場合に、従来は目録をとるために行われる作業の迅速さとか、正確さとか、標準化という面を見ますと、かなりよくなると思いますが、その作業を通じて習熟していく、書誌的な知識はどうなるのか、という危惧、また、館長さんからお話がありました、データベースに入っているものと、入っていないものとの関連というような問題は、非常に似ている部分があるわけで、両方とも機械にできない部分を人間がカバーしていく、その為には、さらに高度な思考力をもって、機械を使っていかなければならないと思うんです。

板垣=人間が手足を動かして作業していたものが機械にとってかわられると、体力がなくなったり、手先が器用でなくなって、これでいいのだろうかと心配するんですね。

加藤=鉛筆が削れない子どもの問題なんか、ありますね。

板垣=頭でやっていたことも、コンピューターにとってかわられると、思考力がなくなったり、知識の蓄積がなくなるんじゃないかと、やはり心配になりますね。

平井=そうですね。だから機械化された場合は、作業を通じて習熟していくのではなくて、作業は作業で終了させてしまう、そして、別の段階でこの本はどういう内容が書かれているか、というようなことを意図的に見ていくという作業が必要になってくるわけで、さきほども、みなさんの意見が一致したように、機械化されても楽にはならない、ということになるわけで、更に高度な思考力や、どんどん打ち出されるデータを上手に使いこなす知識が必要になってくるわけですね。

加藤=DIALOGのようなものでも、こういう雑誌の何月号にこういう論文がでていますよ、ということは瞬時にわかりますね、しかし、それだけがレンタルサービスのすべてではありませんし、利用者はそれ以上のものを求めてくるでしょうし、一歩踏み込んだサービスというものが生まれてくるだろうと思います。ボタンを押せばデータはでてくる、しかし、それは単なるデータにすぎない、という感じですね。

伊藤=作業をしていく上に自然と身についていく知識というのは、無意識というか、知識をつけようと構えていない状態で身についていくわけですから、何年かすればだれでもが、自館の蔵書について、かなり知っているということになるんですが、作業と切り離したところで、勉強は勉強することになりますと、大変ですし、そういう時間はおそらく持てないだろうし、勉強することは多くなる一方で、勉強する時間は少なくなるだろうと思います。従って、そこで、なんとか知識をふやしていこうとする人と、怠けてしまう人の差が、従来より顕著になってくるんじゃないでしょうか。

司会=さきほど、伊澤さんもおっしゃったことですが、参加意識といいますか、私達がデータベースを構築しているんだ、ということがあるんだ、ということについて、実験導入ではアウトプットだけで、データを入れる

ことはなかったんですが、本格的に始めるとなると、自分の作ったデータが入るのだ、というような期待は、伊藤さん、ありますか。

伊藤=期待というか、まあ、実際に使ってみた感じとしましては、今まで手づくりで目録カードを作成していたので、ほとんど自分達独自でやっているわけですね。従って、これでいいのかなあ、という不安はあるんですね。しかし、こういうデータベースを使うことによって、標準的な型で目録カードが作成できるということですね。まあ、あのLCなどもAACR1から2に切替えたということもあるんですけども、それも、やっぱりカタログによって、それぞれの条文の解釈が違ったりというようなことが当然生じてくると思うんですよ。そういうことから考えても、一つのスタンダードな型で目録が作成されるということは、利用者にとっても大変いいことだと思います。実験導入では、こういったいい面だけがクローズアップされたというようなわけで、自分で作ったものを入れるというようなことは、まだ実感としてわかりません。

小川=今までではネットワークでなくて、単館での仕事ですから、外部から批判されることはなかったわけです。でも、こうしたネットワークにのっ

てしまうと、特にオリジナル目録のようなものだと、作成するものが標準的なものを作らなければなりませんので、その技術はある程度の段階になければならないでしょうし、すでにデータとして構築されているものから引き出す場合でも、実際に自館の該当する資料と対応させる、いわゆるデータを見る眼、といいますか、即座に判断する能力というのは、今以上に要求されるんじゃないかなと思いますが。



小川光男氏

伊藤=そうですね。今までより以上に、熟練していなければ、充分UTL ASを使いこなせない、というか、効率よく使えなくなる。従ってプロフ

エッショナルな面が、今までより強く要求されることになるでしょうね。

司会=今は参加する喜びというよりは、この程度の目録技術でいいのだろうか、という不安の方が多いようですが、板垣さんはどうですか。

板垣=そうですね。やはり私もユーザーがUTLASを育てていくというのは理想の姿だと思うんですけど、私達の図書館が、そういう風な参加館になれるかどうかというのは、やはり、まだ時間がいると思いましたし、私自身も実質1ヵ月ぐらいだったんですけど、実験導入は、はっきりいって、ただ端末の操作をしただけで、実際にデータを見て、そのデータがどれだけ自館の目録に合っているかという、そういう判断は、すべて小川さんに任せてしまったものですから、私自身はまだ、その力がないような気がします。やはり、これからが大変だなあ、というのが正直なところの実感です。

事務長=だけど、検索時間は、最初7分とか8分かかっていたのが、おわりの方になると2分ぐらいでやっているんですね。機械操作の面だけ見ますと、短期間に上達していることがわかりますね。システムと端末が使いやすくできていることもありましょうが、一つ一つ、いろいろな判断をしながらやっているわけなので、そういう面の習熟も、数をこなすと、短期間に力がつくものだと思いますがね。

UTLASの未来像

司会=話を一つ前に進めまして、わが国におけるUTLASの将来像ということに入りていきたいと思いますが、特にUTLASが目指す大学図書館像といったことについて、黒岩さんの方からCATSSが動き出す前のカナダの大学と、それ以後の大学は変ってきたのかどうか、という、そのあたりのことをお聞かせねがえませんか。

黒岩=ネットワークの一番の意義というのは、要するに、こういうものに参加することによって、利用者が、この本が欲しいというときに、購入して、書架に並べるということは、以前ですと、すごく時間のかかることな

んですが、コンピューターシェアードカタログでコピー・カタログをとして、その間の作業を短かくすることによって、利用者が一日も早く本を手にすることができる、ということがありますね。現在の図書館はシリアルズもそうですし、単行本の型としても、プロシーディング、すべてのパンフレット類までが次々に大量に入ってくるわけで、それをいかにバックログにしないで書架に並べるか、というと、こうしたネットワークによるより仕方がないと思うんです。従って、OCLCをはじめ、こういうものがなければ、どうなっていたか、ということは考えてみるまでもありませんが、必要で生まれたシステムであって、これができたから、どう変ったか、というようなものではないと思います。

館長= そうですね。1年に6万冊受入れるというと、365日、毎日目録をとって、1日に164冊、まあ、仮りに200日作業すると1日に300冊ですから、これは大変な量ですね。利用者に早く資料を提供するということは大切なことですが、なによりも無駄なことは、どの図書館も同じ目録をとっているということで、こんなことは早くからいわれているけれども、日本ではまだシェアードカタログということができないでいるわけで、これは逆に見ると、まだ、その必要がないということもあるわけで、ようやく必要に迫まられて、検討しはじめたと考えるべきでしょうね。

司会= 具体的に学生の論文の質が向上するとか、研究者のペーパーの数が増えるというような傾向は見られますか。

黒岩= そういう調査もあります。それはオートメーションだからということじゃないですけどね。学生がどういう文献を何回使ったか、ILLをどれぐらい使ったか、ILLを通じてオーダーした資料が手元に来るまでに何日かかるか、それがどういうふうに学生が学位論文を書くときに影響しているか、という調査はありますね。

司会= 受入れ側の大学図書館として、これをどう活用していったらいいか、というようなお考えを館長はお持ちですか。

館長= やはり、今の話のように、一つは非常に容易に、短時間に、必要な

情報が獲得できるということが、最大のメリットでしょうね。それについて、特に先生はもちろんですが、学生の図書館利用が比較的増大してくるんではなかろうか、今までのよう、カードを繰って、申込んでという繁雑さ、あるいは、講義で聴いた関連の文献を当たるときにも、そういういった検索の知識を持つことによって、簡便に広く獲得できる。まあ、そういうたあたりは、これは別に大学に限ったわけではありませんが、図書館としては非常に利用度が高くなる要素が含まれているんじゃないかなと、そんな風に思いますけどね。

司会=サービスする立場から、事務長はどの様にお考えですか。

事務長=UTLASによるカードカタログから、これをどんどん拡大していく、レンタルサービスもできるし、いろんな分野のサービスもできると思うんです。従って、より広い情報サービスを目指したいと思います。

小川=今の点で少し気になることがあるんですが、平井さんに伺いたいんですが、特にアメリカなどでは、例えばDIALOGみたいなもので情報検索しますね。そうしますと、最近の傾向としまして、そうした、何というかなあ、個人的というか、ごく限られた人へのサービスに対する課料金的な考えが非常に普及してきましたね。そうしますと、こういう目録のデータを使った場合、単なる目録としての検索と、情報検索というものとは課料についての考え方の違いみたいなものがでてくるんじゃないかなと思いますが。

伊澤=お金の面からですか。

小川=はい、そう思うんですけど、どうでしょうか。目録のデータについての、情報検索では課料というか、そういう記事は読んだことがないんですが、DIALOGについては、ある一定の額を超えたたら、課料するとかあるいは全面的に課料するとか、受益者負担の考え方もでてきますよね。

平井=システムの違いによると思いますが、DIALOGの利用者の場合は、殆んど研究者、あるいは学生といった個人単位のところで、それが図

書館のレファレンスのトータルとして使われようが、最終的にその情報を渡すのが、その個人ということになるわけです。従って、DIALOGでは2000のパスワードとか3000のパスワードとか、そういう関係になってきますけど、UTLASのシステムというのは、あくまでも図書館の人達が利用するし、そのことでは課金というか、その個人単位での支払いというのではなく、これがオンライン目録になっても、結局図書館の中のシステムですから、人間がやっているときと同じ様に課金は払わない、つまりレファレンスをやるごとにいくら払うということはないんですね。私は、今、情報検索システムと図書館のシステムと二つに分けましたが、これからは、さきほど黒岩が申上げたように、あるデータベースから別のデータベースへと、ズーと通っていってしまうことがありますと、どこでそれを区別するかということで問題がでてきますね。ビブリオグラフィック・ユーティリティのUTLASなんかも、最近はインフォメーション・ユーティリティなどという名まえも使っていましますし、書誌情報だけではなくて、違う情報もどんどん入れていくというようなことが起ってきますと、まあ、情報検索とのかかわり合いというようなものが判断しにくくなるかとも思います。

司会=図書館の有料制につながっていくかもわかりませんね。

小川=一つの要素になるんじゃないかと思うんですけど。

平井=ただ、もう一つUTLASのようなシステムが入ってくることで、図書館サイドで大きく考え方方が変ってくるかもしれません、日本の図書館では教員が研究室に本を持っていってしまうでしょう、そうすると手作業の場合、集中管理ができなくなるのですが、こういうシステムが入ることによって、図書館で資料を集中管理して、どの先生の研究室にはどの本があります。というようなことがすぐにわかる。また、本の入手なども図書館に注文した方が早く手に入る、というようになれば一層集中管理が進むわけですね。

加藤=重複発注も避けられますね。

板垣=あまり管理を進めますと、利用図書の公開の問題で、プライバシーの問題にふれますから、個人の名までは管理すること、または、公開することはできないにしても、どの学部にあるぐらいのロケーション情報は瞬時にわかれば都合がいいでしょうね。

加藤=発注とか購入が迅速に行われるようになりますと、資料選択の分野でも図書館の役割が拡大しますので、出版情報というようなものにたえず目を向けていないといけないという、課題が一つふえるわけですね。

伊藤=利用状況とか、蔵書構成とか、資料購入の傾向だとか、いろいろなデータを元にして、資料の選択もできますし、利用指導とか、未利用資料の発掘といったものまで、サービスの質が深まっていきますね。

平井=そうですね。北米の最近の流れですが、発注、受入れ、整理、サービスというような一つのシステムの中でのテクニカルサービスと呼ばれるようなセクションになってきています。そういう意味では、図書館における資料の持ち方と、その資料の購入形態などにも影響を及ぼしていると思います。そういうことが、先ほどの研究者、学生などのレポートがどういう風に変るかということとも、多少かかわってきます。

司会=UTLASは独立採算制というか、独立した企業なんですが、トロント大学もお金は払っているんでしょうね。

伊澤=ユーザーとして払っています。ビッグユーザーで、普通のメンバーとかわりありません。トロント大学図書館とUTLASのシステムとは、ユーザーとユーティリティの関係です。

黒岩=値段の面でも、DIALOGの情報検索サービスと、UTLASなんかでやっている情報サービスというんですか、データをサービスするというようなものと、かなり値段が違うと思います。



板垣和美氏

司会= U T L A S とトロント大学図書館との関係というのは、今一つ理解し難いところがあるんですが、もとはといえば自館、もしくは O N U L P で開発したデータベースなのに、後から参入したところと全く同じ資格だというのは不都合だ、なんていうことは無いでしょうかね。

平井= U T L A S からすれば、トロント大学はうるさい客だということでしょうね。もともとはうちの図書館のものだから、こういうところはきけ、というようなところもあって、結構うるさいということです。それに、もう一つは、さきほどお話ししました、こういうユーティリティができるくる関係と、自分達の参加の問題なんですが、みんなでシステムを作りあげた。さて、どこかへ置かなければいけない、トロント大学がいろいろな条件が整っていて、一番いいんじゃないか、ということで、トロント大学に置いた。それをトロント大学が割と面倒をみているうちに、大学から切り離して大学の所有する小会社という関係になる。経済的にも独立しなさいよという関係で U T L A S ができたわけで、企業の形態でも利益をあげる会社と、ノン・プロフィット、ノット・フォア・プロフィットの企業形態がありますが、U T L A S はノット・フォア・プロフィット形態で、儲かれば儲かった分はシステムの拡大強化につぎ込む、マイナスになれば費用を大学とか州とか国がもつ、ということで、独立した企業形態をとりながらも、多大に大学や州や国に負っているわけです。更に国際的な企業としての事業化が進められています。そういう意味ではカナダの国策に沿った会社ということができますね。

司会= U T L A S の成立事情とか企業の形態の話など、興味ある問題ですが、あまり話題を広げることもできませんので、さきほどの参加意識、具体的にはオリジナルなデータを入れるという話にもどりたいと思います。

平井= さきほど、伊藤さんの方から、自分のところのデータを入れる際の正確さについての話がございましたでしょう。立教大学さんで U T L A S を使っていただいていて、最初はオリジナルを入れるとき、「笑われたらどうしよう、これをアメリカの人もカナダの人も見るのはと思うと不安が

先に立って……。」と笑っていましたが。UTLASは利用していただくと、自分のとこのファイルをどこが利用したというのが出てきますので、結構、自分の作ったオリジナルをアメリカの図書館もカナダの図書館も利用してるんですね。「『うん、まんざらでもないなあ』と自信がつきました。」と話されていました。そのあたりから参加する喜びが出てくるんじゃないですか。

伊澤=使っているのも、みんな同じ図書館員だということだと思いますね。だから、どこかが、やや不完全なデータを入れたとしましても、これは古い本だったから簡略なデータだったんかな、というような、これは取りようですが、善意で見てくれると思いますよ。目録一つを見て、それが質が良いとか悪いとか、記述のレベルが高いとか低いとかを一概に判断できないと思いますね。公共図書館と高度な研究図書館では目録に要求される、内容が違ってきます。従って、公共図書館だから公共図書館の作ったものを利用するとか、大学図書館は大学図書館の作ったものを利用するということはありますが、それは、一番似通った目録規則をもった図書館のものを使うということであって、間違っているとか、そういう問題ではないと思うんです。あまり、そういうことをこわがったり、慎重になりすぎると、いつまでたってもオリジナルは入れられないですね。

館長=そうですね。一つの勉強の場として、積極的に参加していくと、その図書館のレベルが向上していくでしょうね。現在作成している目録カードでも多くの人の目に晒され、ここが違ってるんじゃないか、とか、どうも利用しにくい、というような意見がどんどんてくると、目録技術も進歩してくるでしょうね。批判の無いところには進歩なしで、一大学内にとどまらず、世界の人、とくに世界の図書館員に利用してもらえるということは素晴らしいことです。

伊澤=見る人が多ければ多いほどレコードはいいものがどんどんできてくる。お互いに参加館の館員がみんなでレコードをつくるというセンスをもってメンバーになるということは、とても大事なことだと思うんですね。

伊藤 = ちょっと細かいことになるんですけど、UTLASについて書かれた資料を読んでみると、UTLASのシステムの中にデータ監査という形で、目録のチェックみたいなものがあるということですが、今の話では参加館が各自、自分の図書館の目録レベルで入れるとおっしゃいましたね。そうしますとデータ監査と、そういう目録レベルとのギャップはどうなるんでしょうか。つまり、全く間違ったものを入れた場合は間違いとわかるでしょうが、間違いと判断できないようなもの、そういうものの監査はどういうふうになっているんですか。

伊澤 = 図書館内のファイルですね。ユニークネスのチェックはあります。これはオプションで、「あなたの図書館はユニークネスのチェックをしますか、しませんか?」ということで選択するわけです。ですから、一応 ISBNとLCのカード番号によって、例えば、中京大学のファイルに重複のデータが入らないようなチェック機能をもてるんですね。ただUTLAS自身としては、データベースの中に入ってくるデータを、不完全だからインプットできませんよ、とか、これこれのタグを足さないと、ファイルできませんよ、というようなことはありません。こういう点を見ますと、データのごみが、たくさんコンピューターの中にたまってしまう危険性がありますが、実際にはそんなに困った問題にはならないものなんですね。これはメンバーの信頼感にもとづくものだと思うんですが、みんなが、ベストのものを入れようと努力すれば、そんなにめちゃくちゃなものは入れないものなんですね。従って、UTLASは、そういうふうにどういうデータでも入れられる、その図書館にとって必要な形を保つデータであるならば、どんどん受け入れられるということが、長所になっているわけで、ある一定の目録レベルに達していないからとか、これはUTLASの基本的な目録のとり方と違うから、というようなチェックは全くありません。

伊藤 = ですから、例えばLCMARCとUKMARCが著者基本記入、書名基本記入という形で混在していても別になんともないわけですね。

伊澤 = ええ、そうですね。多巻物の扱いにおいてもBLとLCでは違うこ

とがありますので、図書館によっては U K M A R C の方が使いやすいとか、L C M A R C の方が合っているとか選択する余地があるわけですね、こういったことは、間違いというのではなく、目録の規則、あるいは資料のもつている性格の解釈の仕方の違いで、それをどちらかに決めてしまって、他を受け入れない、ということはしないわけです。一つ一つ例を挙げればきりはありませんが、少しずつ違う目録も、それはそれなりに受け入れていく、非常に寛大なシステムだと思います。

板垣=さっき、平井さんのお話で、立教大学の例なんですが、日本の大学図書館が入れたものをアメリカの大学図書館で実際使ってくれるというのは、英語で日本を紹介したものとか、特別な本の場合でしょうか。

平井=いや、そうではなく全く普通の。

板垣=英語の……。

平井=ええ、ドイツ語であったり、フランス語であったり。

伊澤=多分、立教の場合はドイツ語のものの入力件数が多いのじゃないかと想像しております。というのは、あの資料の収集方針上、ノンヒットになるものは、どちらかというと、ドイツ語のもののパーセンテージが高いんですね。英語のものより。英語のものでも最新のものなら入っていないこともあります。実際は、もう少し待っていれば L C が入れるんじゃないいか、ということで、すぐには入れないでしょうが。

伊藤=そうですね。アメリカで出版される本は、やはりアメリカの図書館の方が先に手に入れるでしょうし、もし、ヒットしなくとも、少し待てば入っているということになるでしょうね。

伊澤=立教大学はドイツ語の古い経済学の本というような資料を割と積極的に入れていますので、そこらあたりでしょうね。

黒岩=最初にどこの図書館の目録であるかを示す W H O コードを見て決めるというよりは、出してみて、カタログを見てみて、いいかどうかを判断を自分がすることですから、日本の立教大学図書館が、いいデータ、というより最適なデータを入れていれば、そのカタログは日本でとったも

のであろうと、どこでとったものであろうと使われるわけです。

板垣=そういう風にいわれると、ますますいいカタログをとらないといけない、というように意識しますね。

JAPAN MARCと日本語処理の問題

司会=研究者や学生が育つというより、先に図書館員が育つ、というような話になりましたが、次は JAPAN MARC や学術情報センターの動きとのかかわりについて話を進めたいと思います。まず、アウトラインを平井さんから。

平井=今 UTLAS では、JAPAN MARC のテストテープを取りよせて、日本語の処理問題を、正式には1985年から検討していくのですが、もう、すでに実験もやっております。 UTLAS 側が JAPAN MARC を考える際の要件といいますのは、 UTLAS が日本のみにそのサービスをしているからだけではなく、 RLIN のシステムでは CJK といいますが、中国語、日本語、韓国語の処理をすでにやっていて、端末もできています。 OCLC も昨年から日本語、中国語、韓国語の処理に正式に取組むということを発表していますし、まあ、そういう関係で、 UTLAS としては、こうした競争からも、また、機能としても CJK の処理に取組まなければならないわけです。例えばトロント大学ですと 10 万冊ぐらいの和書を持っていますし、アルバータ大学ぐらいの大きな大学は年間 5000 冊ぐらいは和書を購入しているという背景があるわけです。 UTLAS の場合は日本でもサービスをしていることもあって CJK の処理問題が重要になってきたわけで、特に日本人が使い易いシステムを検討しているということです。

司会=伊澤さんはスタンフォード大学で RLIN の CJK 端末を操作したと伺いましたが。

伊澤=アメリカの人やカナダの人が漢字に接する場合、わたし達が接するのと全く違うということですね。 CJK 以外の国の人には、漢字が読めない

場合、読めないのでから音からも訓からも、もちろん引くことはできません。又、画数からも、いわゆる部首などから引くこともできません。

事務長= そうですね。日本人なら、読めないといつても、義務教育終了ぐらいのレベルですと、音がわからなければ訓から、両方ともだめなら漢和辞典で部首別に、それもわからなければ総画索引で引くというように攻めていきますね。

伊澤= そうですね。従って、そういうことができない人が扱うことを前提としてシステムを考えられているわけです。スタンフォード大学のバーインスティテュートという東洋学科のある図書館で、R L I N の C J K の端末を見せていただきましたが、日本のワードプロセッサーのやり方とは全く違っていて、漢字そのものを分解して、一つ一つを別々にキーを叩いて入力して、一つの漢字を作るんですね。

加藤= ワープロなら、仮名で入れて、漢字変換をしていくわけで、あまり時間はかかりませんが、それは、日本人だから、というより、漢字を相当知っているから、変換できるわけで、そういう知識がなければ漢字の入力は大変でしょうね。

伊藤= われわれが韓国語のハングルに接する場合でも、又、中国語の漢字は理解できても、四声というようなものがあって発音がわからない、という状態で、これは英語やドイツ語やフランス語に接するより、同文同種などといいますけど、手に負えないところがありますね。

伊澤= そういう観点から C J K を同じ処理方法でいけるように R L I N ではシステムを開発したわけですね。例えば、源氏物語の「源」は「さんずい」と「がんだれ」と、「はく」と、「しょう」を叩いてからセンドのボタンを押すと「源」が入るわけです。オペレーターは飽きなくて面白いといいますがね。

板垣= 時間がかかる、大変でしょうね。作業効率ということから見れば、実際に日本では使い物になるのでしょうか。

平井= そういう意味で、U T L A S では日本人が使いやすいシステムを作ろうということで、11月の初めにも、U T L A S から日本語の処理担当者

が来まして、日本のコンピューターメーカーと打合せを始めました。で、JAPAN MARCにつきましては、漢字の問題や外字の問題があつたり、コンピューターの機能上の問題があつたり、複雑な問題を抱えているわけです。そういう難問を早い時期に、早い時期といいましても、1年か1年半では解決できないのではないかと思いますが、そのシステム化ということになりますと、長期的にやっていくということを決めました。1985年から一番重要な問題として取組むことも同時に決めたわけです。

UTLASと学術情報センター

司会＝学術情報センターの方の関係は

平井＝簡単に申上げますと、学術情報センターは文部省で、情報検索と、目録作成のシステムを併せた機能をもったものを開発しようと取組んできましたが、目録作成システムが厄介なので、直接には扱わない方針で、文献情報センターという組織にして、昔の教育大跡地に事務所を置きました。そして、現在開発に取組んでいるんですが、私達から見ますと、実際に図書館のシステムとして取入れられ、稼動していく、いわゆる実用化される段階に至るには、まだまだ時間がいると思います。さきほど伊澤からも話があったのですが、UTLASのシステムも、十何年やっていても、今なお、どんどん改善されていくという部分があるということで、一朝一夕にはこういうシステムはできないということなのです。一方、UTLASは日本語処理の問題で、日本人だけでやっているわけではないという意味でハンディキャップを持っていますが、大きな利点というのは、既にできあがった図書館システムの中に日本語の処理をいかにうまく入れていかれるか、ということだけで済みます。これは、どちらが簡単でより優れた結果を出すかということはいえませんが、ユーザーの選択に委ねられ、便利な方へ流れていくことになるだろうと思います。もう一つは、データベースの問題で、先発の方に情報は集中していくもので、後発の方はどうしても不利になります。で、北米ではRLINとOCLCとを併用していると

ころがあるように、UTLASと文献情報センターを併用するということは起るだろうと見ています。従って、同じ機能を持ったとしても、二つのシステムは並行して存在することになろうと思います。

小川=少くとも、現状で考えるなら、学術情報センターは当初からみると、かなり進展したとはいえ、使用上かなりコストがかかりますね。なおかつ、それだけのコストをかけたとしても、漢字処理の問題で、まだ いくつかの問題が残っている。そうしますと、平井さんのお話で、日本では学術情報システムというものを完成させるという方向で進んでいますけども、結果においてはどちらが早いかというと、つまり、UTLASのCJKの開発が早いのか、学術情報システムが現在のUTLASのレベルに達するのが早いか、ということを考えると、今の時点では何とも予測できないわけですね。で、もう一つの観点からJAPAN MARCを考えますと、これも国会図書館の中ではオンラインが可能になったようですが、外部では使用できない、三菱総研が専門図書館を対象として、こういうオンラインサービスを始めているという話はありますが、検索システムだけで一般的なものはまだない。すると、国内の書誌情報とか、学術情報の処理が実際に使えるのはいつになるのだろうか、ということは、とにかく雲をつかむようなものですね。

伊藤=いつまで待てば、これだけのものは利用できますというような、具体的な予定というようなものが示されれば、こちらも対応のしようがありますがね。

板垣=図書館では毎日毎日、情報の洪水の中で、その処理に追われているので、明日からでも使えるものを、という考えになりますね。

小川=もう一つ、現在考えていることは、データベースの構築の仕方の違いということなんです。つまり、UTLASは、一つ一つの館の目録のデータベースファイルを作っていくという考え方をとっていますが、学術情報システムでは、一つの書誌データに対して参加館の所蔵データを重ねていくという考え方をとるですから、自館用のデータベース云々という

ことがなかなか考えにくいんじゃないかということです。それと、システム的に進んでいけば、確かに所蔵データと書誌データを結びつけることによって、総合目録的なものができるかもわかりませんが、ここにも受益者負担的な考え方方がてくるんじゃないかなと思います。

司会=学術情報システムはまだ開発中、片方は販売されているということで、この両者を比較することはできませんが、日本の教育行政のあり方からいって、文部省で推進しているということもあれば、気になることですが、話題を先に進めて、相互協力の窓口として、加藤さんはUTLASの導入によって、どんな変り方が予想されるでしょうね。

加藤=実験導入のとき、私は洋雑誌の担当ということで少しは端末に触れたのですが、あまりUTLASについては知識がなくて、どう変っていくだろうか、というような予想もできないんですが、相互協力の面からいきますと、現在、大学の参加館も少なく、今の時点ではわかりませんが、今後、参加館がふえていきますと、居ながらにして、他館のデータが入手できる。つまり、今、私どもが、相互貸借や文献複写をやっていて、学術雑誌の情報は割合探しやすいんですけど、図書に関する情報が少ないんです。まあ、各大学で出している冊子体の蔵書目録を丹念に調べていくという手段しかないんですね。それが、オンラインで、即座に所在を知ることができますと、仕事が楽になるというより、サービスは飛躍的に拡大されると思いますね。

事務長=例えば雑誌では今の資料検索というのは手作業で、学術雑誌総合目録を繰ってみて見つけるわけで、リアルタイムでディスプレーされるようになれば、非常に短時間で検索作業はすむわけですね。ユーザーは一刻も早く資料に接したいので、サービス向上という面では、今にもこれを入れてやらなければ、というぐらいのものですがね。

小川=今のお話で、学術雑誌については学総目というのがあるんですが、洋書については、国会図書館の出している新収洋書総合目録しかないわけで、それもどういうわけか、中京大学の図書館には無いわけです。

板垣=人が検索する場合は、各人のスキルが、検索できるかできないか、または、適当な資料が提供できるかできないか、ということに大きなかかわりをもってきますね。ところが機械検索ですと、キー操作を教えてもらえば、昨日今日入った人でも、古い人でも等質なサービスが行える。まあ、極端ないい方かもしれません、検索の面だけですと、あまりキャリアが問題にならなくなるんじゃないでしょうか。

館長=そうですね。研究者としても、特に文系の方は、図書館でカードを繰って、関係の文献を探し、そのリストの中から、関連のある内容を抜きとる、いわば研究の前段階というようなところで、非常に時間をとられるという状態や、書庫に入って、終日、本を探すなんていうことからは解放されますね。しかし、それだけ研究者に満足のゆく情報をデータベース化できるか、というと、まだまだそれは先のこと、徐々に便利になってくる、ということで、劇的な変化はないでしょうね。

加藤=相互貸借は盛んになるので、そのやりとり、本を小包にして、宛名を書いて送る、というような作業、あるいはコピーをして、郵便で送る、というような作業がふえるでしょうが、文献複写などはファクシミリで電送し、代金決済もコレクトコールで、電話料金として支払われるというようになる、つまり、オフィスオートメーションも同時に進行するので、それほど、心配したことはないと思いますが。

板垣=オフィスオートメーションが進めば、体を動かして、というか、機械的な作業の部分は、機械が代行しますが、そういうものをカバーするところで、知的な部分で、司書の存在を示す努力というのがされなければならなくなるので、やはり、だんだんむつかしくなるというか、勉強が必要になってくるということでしょうね。

小川=学術情報システムによって、図書館が変ってくるのは、それは確かに変わってはくるでしょうが、まだまだ先だということでしょう。現在、私達は 受入れられた図書を、どのように迅速に処理していくか、という段階ですから、学術情報システムは海のものとも山のものともわからないと

いう状態ですね。

司会=学術情報システムに寄せる期待が大きいだけに、進捗状況をもどかしく感じるのですが、毎日毎日、本が押し寄せてくる図書館としては、今、現在どうするかという問題ですから、あまり、現時点で、学術情報システムとUTLASのような既存のものを並べて考えていくことは、少し早いのかもわかりませんね。まあ、それにしても、学術情報センターの動きは気になるところではあります。

UTLASのユーザー会

司会=さて、次に参加館への要望と将来の参加館というようなことに焦点を当てて、お話を伺いたいと思います。

黒岩=さきほどから何度も話に出てきましたが、ネットワークを作りあげてきたのは自分達だ、メンバーの一員だ、という意識をもって臨むことでしょうね。単なる情報機関としてみてもらってはいけない、これはできるか、あれはできるかと、受身の考え方でなくて、自分達が作っていかなければネットワークはできないという、積極的な参加意識がなくてはいけないと思いますね。UTLASの場合はユーザー会ができているわけですから、私達は、そのお手伝いをできるだけしていきたいと思います。いくらILLの機能をもっていても、ユーザーの中で、それを使っていくだけのオンラインネットワークでないところでのネットワークができるかぎり充分機能を果さないですから、そういうところでの期待を私達はしているわけです。

伊澤=ネットワークは発信者と受信者の間に相互了解が必要で、お互いの信頼関係の上に成り立つものです。そういう信頼関係が図書館間に多く生まれること、すなわち参加館がふえていって、日本国内のILLが活発になってほしいと思います。先ほどのユーザー会から出てきたいろいろな意見、システムに対する意見とか、その運用に関するものだとか、これは参加館に協力してほしいこともありますし、UTLAS側が何らかの形で

応えられることもあると思いますが、何といってもユーザーが参加して、UTLASを、より使いやすく育てていくという姿勢が必要だと思いますね。私達は最大限のサポートをする態勢はもっています。

平井=私は今後の問題として、まず、日本に文献情報センター、学術情報センターというものが、早くネットワークを形成し、稼動することを望みますね。現在、情断ということ、外国から情報を断たれたとき、どうするかということが真剣に考えられているようですがそれとは別に、LCやUKMARCを入れ、日本は日本の図書館システムを作るべきだということで、本当は、日本語処理の問題のみならず、中国語や韓国語の処理も、日本で開発し、外国に提供するぐらいでなくてはいけないと思うんです。現在はこのデータベースからこのデータベースへ抜けられますよ、というのは技術的に可能なわけで、日本の文献情報センター、UTLAS、OCLC、RLINと、どこへでも繋がるようになれば、という夢があります。今はRLINの参加館とOCLCの参加館ではILLができない、それは図書館の中で考えなければならないわけで、例えばカリフォルニア大学の九つのキャンパスをサテライトを通じて繋いでいくというようなことをしないといけない。しかし、ユーティリティはユーティリティ同士で繋がるということ、これが最も効率的でアメリカの中でも、この考えは育っています。

事務長=近い将来にそういうことができるといいんですが、国の違いであったり、組織単位の立場の違いなどがあって、むつかしいようですね。

平井=あるコンピューターのデータベースを作る仕事に携わっている人にこのUTLASのことを説明しましたところ、「このシステムは、多分に人間を信頼していることに基盤を置いているシステムで面白いですね。」といわれました。

館長=一般の企業などでつくられるデータベースというのは、必ず企業秘密のようなものがあり、セキュリティシステムが二重にも三重にもあります、図書館の場合は開放的な方がいいわけですね。まあ、入れたデータ

を勝手に改竄されてしまうは困りますが、書誌データのようなものを改竄しても何の利益にもなりませんし、まあ、そんないたずらもないだろうという信頼感もあるわけですね。資料を無料で提供している図書館の活動そのものが、信頼感を基盤にして成り立っているわけですからね。

伊藤=個別営利企業が繋がっているネットワークなら、利害関係を生じて開放的にはなり得ないでしょうね。図書館は、そういうことを無視して、ネットワークの組める数少ない機関と見ていいわけですね。

加藤=信頼関係は国境を超えて、例えば、隣りの図書館で借りられる本をB L L Dを使って借りるということは、馬鹿化したことかもしれません、国際的な距離感を失わせる、いわば国と国との壁を感じさせないすばらしさを教えてくれますね。

平井=アメリカのシステムにせよカナダのシステムにせよ、距離の問題よりも、機能として、バラエティに富んだものを準備しておれば、それは国を超えて、一くくりにできるものですし、そういうふうになっていくことを期待しているんです。

司会=中京大学図書館も参加することになれば、参加館として、それなりのイメージを描いていると思いますが、事務長はどの様にお考えですか。

事務長=実験導入によって、本格的に導入した際、即座に操作ができるようなトレーニングはできているわけですが、やはり、本格的に仕事をするということになれば、それなりにいろいろな問題はでてくると思います。まあそれだけのものを乗り超えて、抵抗なく入っていくだけの資質を、うちの図書館員は充分備えていると思います。それは、ハードウェアの操作に短期間に習熟したこと、いろいろな問題に出会ったとき、それに対する処理が適切であることなどからみても、まず心配ないと思われます。

従って、さきほどからいわれている参加意識というか、参加館としての構えのようなものもあるだろうし、1年2年とたっていくうちに、ユーザー会などというものでの働きもできるようになることは予想されますね。

小川=過大な評価をいただきまして、どう答えていいかわかりませんが、やはり、実験導入は実験という範囲を出ないということですね。これが、参加館ということになった場合、業務的にも単に目録作成の業務にとどまらず、ほかの業務への適用ということも自然に生じてくるわけです。そのあたりになりますと、単に端末操作というだけでなく、図書館のトータルシステム、つまり図書館の組織全体を考えに入れていかなければなりません。それから、同時に、單なるオペレーター的な仕事に加えてハードの面に関しての、何らかの知識も必要ですから、今までの司書のイメージとは違った業務が生まれてくると思います。

館長=より高度な能力が要求されることになるでしょうね。まあ、司書の仕事というのは非常に奥行きの深い仕事でしたが、ある意味では専門領域だけにとじこもる学者も、学際的な、非常に広い範囲の知識を持つことを要求されはじめたわけですが、それをサポートする司書の役目は、それ以上に広範囲にわたる知識を要求されるようになることは、一つの時代の要求でしょうね。

黒岩=ただ、仕事は楽にならないということはいえますね。

事務長=あまり消極的にならずに、新しいものに取組む意欲がほしいですね。入ってきたから仕方なく対応するというのではなく、好奇心でもってどんどん進んでやるというような。

伊藤=実験導入の場合は、端末を叩けば、それで仕事は一応終るという感じがありましたが、参加館になれば、体を使うことより、頭を使うことに業務内容が転換していくと思いますね。書誌に関する幅広く深い知識だけではなく、業務全般、即ち図書館活動全般に通じる知識をもたなくてはならなくなりますね。

板垣=端末操作に習熟するといいましても、検索の段階では確かに楽だと思うんです、I S B NとかL C ナンバーで打込めばいいんですから。編集になると、それが複雑になりますから、これからは、やはりコマンドに慣れたりしなくてはならないと思います。みんながいっているように頭

を使わなければならぬと思いますね。

事務長=伊澤さんのお話にあったように、参加する喜びのようなもの、あまり尻込みしないで、フランクに飛び込んでいくことが大切だと思いますね。そうはずかしがらないで。

黒岩=ユーザー会がありますから、これが育ってくれれば、その中でコーディングに関する研修会なども開いてみたり、使い方のアイデアをみんなで出しあったりというような、仲間意識のようなものが育ってくるんじゃないか、と思いますね。

伊澤=もうすでに、端末を扱う人が集まって、研修会を持ちたい、という話は、この夏ごろから出はじめていますが、これを是非実現したいことですね。CATSSⅡに移行した後ぐらいのところで、始められればいいんですがね。軌道に乗るまでは私達がお手伝いさせていただきますが、軌道に乗ってしまえば、参加館同士でその会を育てていけばいいと思います。

加藤=参加館のネットワークを強化する意味でも、そういう会は必要ですね。

平井=UTLASのコーディングマニュアルというのはユーザーが作っているんですよ、それをUTLASが配布しているわけですが、その点からもUTLASはユーザー主体のシステムであるということが、おわかりいただけます。

加藤=UTLASは自館のデータを蓄積でき、しかも他館のデータも利用できるということは魅力的ですね。実験の時、洋雑誌の検索をやらせてもらったんですが、全部ヒットしました。本格導入となれば、やはり、やってやろうという、積極的な姿勢で取組みたいですね。

司会=参加館がふえ、書誌データの共有が進みますとそれに伴って、いろいろなことができるようになると思うんですが、図書館のコーポレーションについての将来をどんなふうに描いていますか。

平井=アメリカより、日本の社会の方が町ぐるみ、地域ぐるみで何かやろうということはあります、どうも、あるものを共同で使うということで

は違うようなんです。特に研究者が本をかかえこんでしまう。つまり研究室へ持っていってしまう、これは日本人の性癖とでもいいましょうか、いつ読むか分からんが、自分の買った本は自分の手元に置きたいというのがあるでしょう。私自身がそうですが、しかし、現在の情報量は個人単位で扱えるものではないということ、スペースからもお金の面からも、共に使うしかないということがだんだんわかってきたと思うんです。UTLASの販売を始めたとき、「うちのは見せたくない、が、よそのは見せてもらう。」というようなことはできるか、などといわれたことがあります、技術的にそれはできます。まあ、見せたくなければ入れなきやいいわけで、共に使うことを嫌いますね。

板垣=やっぱり、うちのものはうちのもの、という観念が強いようですね。他大学の人が借覧を希望したりしますと、「え、借りるんですか?」というように、身構えるようなところがあるんですね。この図書館の資料はうちの大学の人に利用させるものだ、という本当に狭い考え方なんですが、それを、こういうシステムを取り入れることによって、変えていくことができるといいなあと思います。

事務長=大学図書館の場合、公共図書館と違って、もともと、非常に閉鎖的な考えから出発していますからね。各大学の図書館の館則というようなものも、必ずその大学の教職員と学生にのみ利用を限る旨明記されています。今や1館のみで、利用者に満足いく資料を提供できない時代になっているわけで、時代の先端を行くべき研究者が、非常に古い考え方をしていることは困ったものです。

小川=単純な見方かもわかりませんが、発想の仕方が日本とアメリカでは逆じゃないか、アメリカの場合は個があって全体、日本は全体があって個、従って個に集中してしまうんじゃないかと思うんですがね。

平井=そうですね。今話がありましたが、大学の図書館の資料は、その大学の教職員と学生にだけ提供するという考え方、これは大学の財産という考え方ですね。これを、日本の財産、ひいては世界の財産であるという考

え方に変えていかなければいけないし、また、図書館ではそういう考え方には立って進んでいると思うんです。今、小川さんのいった 全体から個へ というのが日本人の発想だとしても、現在のようにどこの図書館でも、すべての資料の購入はおろか、ほんの一部さえ集められない状況へ追い込まれれば、出口を全体へ向けて求めることは当然だと思いますね。

小川=図書館界というものの自体は、国のイデオロギーとは若干違った世界に立脚しているんですかね。アメリカといいますと、一般的にはピューリタニズム、ロック主義、個人主義、営利主義というイメージなんですね。極めて個人単位なところでスタートしていますよね。ところが図書館ということで見ますと、共同システムみたいなものがでてくるということは、図書館は別世界なのでしょうかね。

板垣=それが個人のレベルに下りると、個人主義に合致してくるんじゃないでしょうか。個人のことには、あまりお互いに関心を持たないようにしているから、共同利用ができるわけだと思いますが。

伊澤=個人主義と公共のものに対する考え方ですね。アメリカは特に機会均等という考え方方が強いから、どんな田舎でも、ニューヨークのような大都市でも、同じ様な条件で図書館が利用できなくてはならないという建前がありますから、そういう事からすると、ネットワークシステムによって

サービスする以外にはないんですね。まあそれと、病院や消防署といったような機関と同じように図書館の必要度も高いと考えられていますから、個の枠の中に入ってしまえばしまうほど、公共的なものが必要になってくるのは当然ではないかと思いますね。

司会=アメリカと日本の発想の違いにまで話が及びましたが、まあ、こういうシステムが必要によって生まれ、われわれも必要



福井司郎氏

であるから、導入を考えているわけで、ここに出席している方々は、だれもが、UTLASをかなり高く評価し、将来いろいろな可能性を秘め、さらに発展するだろうと予想しているようです。話し合いはまだまだ続きそうですが、ここらで、館長から、一言お話をいただき、会を閉じたいと思います。

館長＝長時間にわたって、お互いの話し合いの中で、UTLASについての理解を深めることができ、誠に有意義だったと思います。どの大学図書館も大量の資料を、どの様に整理し、利用者に提供していくかを真剣に考えており、その趨勢は機械化へと向っています。オンラインで書誌データをやりとりするというようなことは、夢ではなく、現実の問題になりました。我々は機械化の波の中で、これを自館の中にうまく適合させていくことを検討しなければならないわけで、いきおいこれらの導入も慎重にならざるを得ませんが、かといって、あまりに消極的であってはいけないと思います。この話し合いの中で、幾度もでてきましたが、機械化しても図書館員の仕事は楽にならないだろうということです。図書館員の仕事は地味でこつこつと積み上げていく仕事で、これはいつまでも変わらないだろうと思います。本日は、MASISセンターの方々からも、今まで伺ったことがないようなお話を聞いていただき、本当に有難うございました。館員の方達は、更に研究をしていただき、いいサービスができるよう努力して下さい。